

令和元年6月20日現在

機関番号：35412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04793

研究課題名(和文) 認知症高齢者のイメージを持たせる教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Construction of educational program to give positive image of senior people with dementia

研究代表者

角野 加恵子 (Sumino, Kaeko)

広島文化学園大学・看護学部・非常勤講師

研究者番号：00712366

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：4年制大学の看護学生511人を対象に認知症高齢者のイメージ調査を行い、人格の温厚性、人間としての尊厳性、行動心理面の安定性、活動性の4側面を明らかにした。否定的から肯定的イメージに変化させるシナリオを考案し、映像を用いた教育方法を2年生30人に実施した。認知症高齢者のイメージは肯定的に変化し($p < 0.05 \sim 0.001$)、リフレクションやロールプレイングを活用した教育の有効性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症高齢者イメージを肯定的イメージに高めるDVD視聴やロールプレイング教育を受講した看護学生の感想からは、対象者の感情がわかりやすく、コミュニケーション能力や必要な態度を習得するのに理解しやすいという意見があり、グループワークによるリフレクションを導入した教育プログラムの効果が得られた。これらは、認知症高齢者を看護する上で、質の高い看護につながると考える。

研究成果の概要(英文)：An image survey of senior people with dementia was conducted to 511 nursing students, at four universities, and four types were found: gentle personality, human dignity, behavioral psychology stability, and activity. We devised a scenario to change from a negative trend to a positive image, developed teaching materials and methods for viewing on DVD, and implemented an educational program for 30 people of nursing student second grade. The image of senior people with dementia($p < 0.05$ to 0.001) changed positively, and the effectiveness of education that used reflection and role playing was confirmed.

研究分野：老年看護学、教育学

キーワード：教育プログラム 肯定的イメージを高めるDVD視聴 認知症高齢者イメージ 看護学生

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者は増加の傾向にあり、看護学生はあらゆる領域実習の場で接することが多い。学生自身は核家族化や地域との交流が減少した現代社会で育っており、高齢者との接触も少なく、まして認知症高齢者に関わる経験は少ない。そのため、看護学生は臨地実習で否定的な発言や暴言等の対応に困難さを感じ、コミュニケーションがとりにくく、授業で認知症看護の講義を行っていても学生はなかなかイメージが持ちにくい現状がある。

2. 研究の目的

看護系大学生の認知症高齢者の思いや考え(イメージを含む)の把握を行い、臨地実習前の講義・演習・臨地実習での効果的な教育方法を検討することである。本研究のイメージの操作的定義は、「看護学生が、心に思い浮かべる認知症高齢者への全体的な印象」とする。

(1)看護学生2年生と4年生の認知症高齢者イメージの比較を行い、イメージとの関連を把握することである。

3. 研究の方法

(1)4校の看護系大学学生の臨地実習がすべて終了した4年生300人と、領域実習を終えていない基礎看護学実習のみが終了した2年生321人を対象に、無記名自記式質問紙による調査を行った。調査の時期は、平成28年9月～平成29年3月である。調査票は、封入して回収ボックスに入れた。調査内容は、学生の基本属性、認知症に関する情報源、実習体験、自己効力感、認知症の知識、認知症高齢者のイメージについてである。自己効力感¹⁾の16項目のGSESを用い、認知症の知識は金ら²⁾の認知症に関する知識尺度15項目を用いた。自己効力感¹⁾は、はい、いいえで答える2件法であり、正解を算出し点数が高いほど自己効力感が高い。認知症知識尺度は、そう思う2点、そう思わない1点、分からない0点とし、15点満点で正解率を算出した。認知症高齢者のイメージは形容詞対で示した「暗い - 明るい」などで構成される二極評定尺度であるセマンティック・ディファレンシャル法(SD法)を用い、木村ら³⁾、桂や⁴⁾、草ら⁵⁾、棚崎ら⁶⁾の文献を参考に自作し、25項目を作成した。各形容詞の対のSD法の得点は、最も肯定的な選択肢を5点、最も否定的な選択肢を1点とし、数字が大きくなるほど肯定的イメージが強くなるように得点化した。

分析方法は、ノンパラメトリックを活用し、それぞれ平均値と標準偏差を算出した。2年生と4年生を比較するため、2検定を行った。自己効力感、認知症の知識の2群間の比較については、Mann-WhitneyのU検定を行った。認知症高齢者イメージは、最小二乗法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。項目分析を行い天井効果やフロア効果を検討し、IT分析、G-P分析を実施した。尺度全体と各因子のCronbach's係数を算出した。解析には統計ソフトSPSS for ver.24を用い、統計学的有意水準は5%に設定した。

看護学生には、研究の目的・意義・研究に参加しなくても成績には影響がないことや研究参加は自由意思であることを依頼文で説明した。未成年者の学生には、保護者の了解を得て調査票に記入するように依頼文書に記入した。大学の疫学研究倫理審査委員会の承諾を受けて実施した。

(2)看護学生の認知症高齢者イメージ調査を基に、看護学生の認知症高齢者のイメージを肯定的に変化させる2事例の映像教材を開発した。1事例目は、近似記憶障害と見当識障害があるアルツハイマー病高齢者が、自分の部屋を間違え他の入所者のタンスを開け閉めしていた時、看護学生が「お部屋が違います」と言い、それに対してAは怒りだした。実習指導者は、Aが落ち着くのを待って、Aに優しく声をかけてAの部屋に誘導した。2事例目は、徘徊のあるB認知症高齢者が、病棟を離棟してしまった。寂しく家族に会いたい様子であった。指導者からBの生活歴を聞き、それに沿ったレクリエーションを計画した。

教育目標は、看護学生が問題場面の視聴からロールプレイングを通してリフレクションすることから患者の気持ちや学生の気持ちが理解できる。看護学生が、リフレクションすることから問題となる状況を分析して、学生の対応を評価することができる。学生が視聴を通じて、リフレクションすることから認知症高齢者へのイメージが肯定的になる。学生が、認知症高齢者の対応ができるという自信が起きるであった。看護大学2年生69名に対して、希望者に教育プログラム参加を呼びかけ、認知症高齢者のイメージが肯定的に変化するDVD視聴やロールプレイングを使用して2事例を用いた70分授業を2回行った。調査は、教育前、教育直後、教育1か月後に行い、調査内容は、認知症高齢者イメージ、認知症の知識、自己効力感、学習目標の評価、教育への評価、学生による学習評価である。調査時期は、2018年10月～11月である。

分析方法では、認知症のイメージは、5段階のSD法の回答を求め、4因子ごとに得点化した。認知症の知識は、回答率を算出した。教育プログラムの評価は、5段階で評価し各平均値と標

準偏差を算出、3回調査の認知症高齢者イメージ、認知症の知識については、フリードマン検定を行った。分析には統計ソフト SPSS for V24 を用いた。

学生には、研究の目的・意義、研究に参加しなくても成績には影響がないこと、拒否の権利、匿名化や安全性を保障することを説明した。大学の疫学倫理審査を受けて承認を得た。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査は、2年生の321人へ配布し、回答者が271人(回収率84.4%)で有効回答者数は251人(有効回答率78.2%)であった。4年生には300人へ配布し、回答者数が280人(回収率93.3%)、有効回答者は、260人(有効回答率86.7%)であった。全学生の年齢は、 20.9 ± 1.00 歳であり2年生 20.01 ± 0.49 歳、4年生は、 21.8 ± 0.54 歳であった。合計511人を対象として分析を行った。2年生は、4年生に比べニュー・スや情報番組($p=0.001$)、インターネット($p<0.001$)より情報を得ていた。4年生は2年生より授業($p=0.005$)から情報を得て、実習において認知症高齢者と関わっていた($p<0.001$)。自己効力感については、2年生は 5.73 ± 3.96 、4年生は 6.80 ± 3.97 で4年生が有意に高かった($p=0.002$)。認知症の知識については、学年差はなかった。

(2) 認知症高齢者イメージでは、IT分析・GP分析を行い、2項目を外した23項目において探索的因子分析を行った。スクリ・プロットから因子数を5項目とした。因子負荷量0.4以下の項目を外し4因子19項目が抽出され、学年で比較した。第1因子は、「激しい-穏やかな」「神経質な-おおらかな」「厳しい-優しい」「短気な-気長な」「険しい-にこやかな」の5項目であり、認知症による症状から激しさや厳しい一面もあるが、落ち着いている時には人として穏やかさやおおらかさ、優しさなどがあることにより【人柄の温厚性】と命名した。第2因子は、「無価値な-価値がある」「経験が乏しい-経験豊富な」「劣った-優れた」「憎い-可愛い」「つまらない-楽しい」「貧しい-豊かな」の6項目から成り立ち、経験豊かで優れていることの尊厳性を大切に【人間としての尊厳性】と命名した。第3因子は、「感情的な-理性的な」「扱いにくい-扱いやすい」「危険な-安全な」「頑固な-柔軟な」「不安な-安心な」の5項目からなり、認知症高齢者は、中核症状やBPSDによる不安定さから、柔軟で理性的な安定性を求め【心理・行動面の安定性】と命名した。第4因子は、「消極的-積極的」「暗い-明るい」「弱々しい-たくましい」の3項目からなり、行動力を表すことから【活動性】と命名した。信頼性の検討として19項目全体のCronbach's 係数は、0.834で、下位尺度では【人柄の温厚性】0.806、【人間としての尊厳性】0.766、【心理・行動面の安定性】0.723、【活動性】0.597であった。第4因子の【活動性】はやや低めであったが、内部一貫性はみられた。

(3) 学年別に分析対象者と認知症高齢者の肯定的・否定的イメージの比較を行った。2年生の肯定的イメージは、103人(41.0%)、否定的イメージの148人(59.0%)と否定的イメージが4年生に比べると有意に多かった($p<0.001$)。4年生は、肯定的イメージ161人(61.9%)、否定的イメージ99人(38.1%)と肯定的イメージが2年生に比べると有意に多かった($p<0.001$)。認知症の知識については、否定的イメージの4年生が2年生に比べると有意に高かった($p=0.021$)。

看護学生の認知症高齢者のイメージは、2年生(2.84 ± 0.40)に比べて4年生(3.00 ± 0.40)は肯定的であり、因子構造においては【人柄の温厚性】【人間としての尊厳性】【活動性】が肯定的であった。認知症高齢者は人として尊厳性が保たれ、主体性や自己決定の尊厳を大切にしながら、本人が望む生活に向けてその人の言い分を受容して、気持ちの変換を図る対応が望まれる(小林ら)⁷⁾。4年生は臨地実習指導を通して認知症高齢者を一人の人間として尊重する態度で接し、穏やかに優しく楽しいふれあいを感じるにより4年生は肯定的であったと考える。

(4) 教材を用いた教育プログラムに参加した30名(完了率65.2%)の教育評価を行った。対象者は全員女性で年齢は19歳から21歳、平均 19.70 ± 0.54 であった。認知症高齢者に関する情報源は、授業から授業前12人(40%)、授業1か月後20人(66.7%)であった。ニュース・情報番組から情報を得ている人が授業前、授業1か月後ともに70%台であった。認知症高齢者との関わりは、授業前8人(26.7%)で家族親戚での関わり、授業1か月後は1人(3.3%)地域での関わりであった。教育前の実習での関わりは、病棟で認知症高齢者とのコミュニケーションをとったのが1人であった。認知症の知識は、教育前 10.23 ± 3.13 、教育直後 12.03 ± 1.87 、教育1か月後 12.27 ± 1.76 であり、教育前と教育直後、教育前と教育1か月後において有意差があった($p<0.001$)。認知症高齢者イメージは、教育前 2.85 ± 0.38 、教育直後 3.27 ± 0.45 、教育1か月後 3.15 ± 0.42 であり、教育前と教育直後、教育前と教育1か月後において有意差があった($p<0.001$)。4つの因子の【人柄の温厚性】は、 3.07 ± 0.52 で有意差があった($p=0.032$)。【人間としての尊厳性】は、 3.17 ± 0.27 で有意差があった($p=0.034$)。【心理・行動面の安定性】は、 3.05 ± 0.61 で有意差($p=0.002$)があり、教育前と教育直後、教育前と教育1か月後において有意差があった($p<0.004 \sim 0.029$)。【活動性】は、 3.07 ± 0.32 で有意差($p=0.003$)

があり、教育前と教育直後において有意差があった ($p=0.014$)。

教育に対する評価では、学習到達度調査 3.79 ± 0.47 、教育後の学習調査 3.39 ± 0.42 であり、その内対応への自信は 3.15 ± 0.94 、教育への評価は 3.69 ± 0.49 、学生による学習評価は、 2.75 ± 0.41 であった。学習目標の到達度で評価が高かった項目は、目標 1 の「DVD の視聴は、入所者、学生の感情を理解することに役立った」 4.20 ± 0.55 、学生による学習評価は「グループワークでは意見交換ができた」 4.20 ± 0.48 であり、次に授業への評価の「授業に参加して満足できた」 3.97 ± 0.56 、「授業の内容は理解しやすかった」 3.97 ± 0.62 であった。学生による学習評価の事前準備については 1.30 ± 0.65 と低い結果となった。

認知症高齢者イメージや知識は、教育前、教育直後、教育 1 か月後の比較では、教育を行うことにより有意に肯定的となった。認知症高齢者イメージは、教育直後が最も高く、教育 1 か月後でも肯定的な状態が継続していた。教育評価でも、「DVD 視聴はリフレクションすることから認知症高齢者へのイメージは肯定的になる」は高値であった。認知症高齢者のイメージの 4 因子では、【心理・行動面の安定性】や【活動性】は、教育前、教育直後が高かった。映像を活用した教育により、認知症高齢者の理性的で積極的なたくましさを学んだと考えられる。認知症高齢者の尊厳性からその人の生活歴を大切にしたい働きかけにより、心理行動面の安定性が保たれ、より活動的になると考える。

引用文献

1. 坂野雄二、一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討、早稲田大学人間科学研究(2) 1、1980、94
2. 金高ウン、黒田研二、下園誠ほか、認知症の人に対する地域住民の態度とその関連要因、社会問題研究、60、2011、49-62
3. 木村誠子、片岡万里、看護学生の老年看護学実習前における認知症高齢者イメージの特性 - 一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較 -、高知大学学術報告、55、2006、37-43
4. 桂晶子、佐藤このみ、看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ、宮城大学看護学部紀要、9.11(1)、2008、49-56
5. 草地潤子、千葉京子、老年看護学学習過程における学生の認知症高齢者に対するイメージの変化、日本赤十字武蔵野短期大学紀要、20、2007、15-24
6. 棚崎由紀子、奥田康子、光貞美香ほか、看護学生のグループホーム実習における認知症の知識及び認知症高齢者イメージの変化とその要因の検討、宇部フロンティア大学看護学ジャーナル、4(14)、2011、51-59
7. 小林敏子、第 6 章認知症ケアの原理・原則、日本認知症ケア学会編、認知症ケアの基礎、東京、2006、93-98

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

角野加恵子、中谷久恵、大埜美樹、金藤亜希子、吉本知恵、小川智子、三宅弘枝、看護学生の認知症高齢者のイメージとの関連 - 2 年生と 4 年生を比較して -、日本認知症ケア学会、査読有、18 巻 2 号、2019、(7 月発刊予定)

〔学会発表〕(計 5 件)

角野加恵子、中谷久恵、大埜美樹、看護系大学 4 年生の実習後における認知症高齢者イメージ変化に関する要因、第 27 回発達心理学会、2017

角野加恵子、中谷久恵、大埜美樹、金藤亜希子、吉本知恵、小川智子、看護系大学 4 年生の実習後における認知症高齢者イメージ変化に関する要因、第 38 回日本看護科学学会、2018

角野加恵子、吉本知恵、看護系大学 4 年生の実習における認知症高齢者への思いや考えの変化と指導者の指導内容との関連、第 32 回日本看護研究学会中国四国会学術集会、2019

角野加恵子、中谷久恵、大埜美樹、金藤亜希子、吉本知恵、小川智子、日本発達心理学会第 30 回大会、2019

角野加恵子、中谷久恵、看護学生が実習で体験した認知症高齢者の症状と実習指導者の指導内容、第 20 回日本認知症ケア学会大会、2019

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：中谷 久恵

ローマ字氏名：(NAKATANI, hisae)

所属研究機関名：広島大学大学院医系科学研究科

部局名：地域・在宅看護開発学

職名：教授

研究者番号（8桁）：90280130

(2)研究協力者

研究協力者氏名：大浴 美樹

ローマ字氏名：(OEKI, miki)

研究協力者氏名：金藤 亜希子

ローマ字氏名：(KANEFUZI, akiko)

研究協力者氏名：吉本 知恵

ローマ字氏名：(YOSHIMOTO, chie)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。